2021年度 ドコモ市民活動団体助成事業 活動成果報告書

2022/9/11

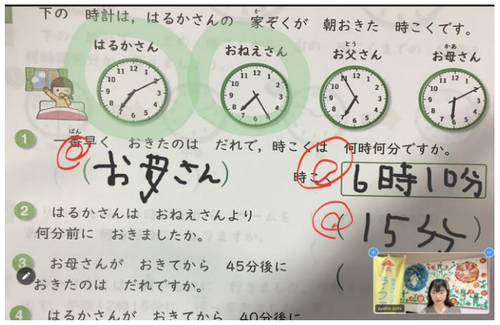
団体名	認定ＮＰＯ法人ラ･ファミリエ	活動タイトル	コロナ禍に対応した病気の子どもへの学習・余暇支援実施可能な支援者育成事業

望ましい社会状況および団体のビジョン（社会的役割と活動基盤）

●望ましい社会状況(ビジョン)	当法人は「子どもが子どもらしく生活し、成長することのできる社会」づくりを目指している。変化する現代において、病気や貧困、虐待など子どもたちが置かれている状況は様々であるが、どのような状況下でも教育を受けること、主体的に学ぶことができる機会が保障されていることは子どもの権利である。当法人が支援している子どもたちのように、病気による入院や長期療養のため学校に通学できない状況でも、子どもたちが学びを深め、子どもらしく成長することのできる社会づくりをめざす。
●団体の社会的役割(ミッション)	病気の子どもたちが社会的自立に向け成長発達することを支援することで、共生社会の実現をめざす。 ①入院や長期療養等により学習ニーズが生じている子どもたちに学習機会を保障することで、学齢期の育ちを支援する。 ②病気の子どもたちとその家族への相談支援事業等を行い、家族ごと支援することで、子どもたちが安全・安心に成長していく支援を行う。 ③病気の子どもたちに関する啓発活動を行い、病気や障害があってもなくても共に生活できる地域社会づくりに貢献する。
●団体の活動基盤	●望ましい人的資源：学習指導や病気療養児の心理・生理に関する専門性のあるスタッフや教育支援者を経常的に育成するための専門的な知識技能のある人材。 ●望ましい物的資源：病院内で利用可能なインターネットや、遠隔での学習支援を可能とするICT機器や通信ネットワーク環境が構築されていること。 ●望ましい活動資金：学習支援者の交通費、学習支援者と希望者のマッチングをするスタッフの給与と交通費。 ●望ましい情報：病院内で活用可能なインターネット環境の構築に関する情報。

■活動風景

オンラインでの学習支援の様子



■活動報告

(1) 病気の子どもたちに対してICT機器を活用して遠隔学習・余暇支援のできる支援者育成のための研修会

病気の子どもたちの学習支援に関する研修会をR3年9月～R4年5月（第1期）とR4年5月～（第2期）で実施した。研修は全6回で構成した。第1期は11名が参加し、第2期には26名が参加した。

(2) 入院や長期療養などにより学習や人との関わりにおけるニーズが生じている子どもたちに対する対面ないし遠隔学習・余暇支援

個人面談を終え、対象児との都合が合う受講生が学習支援ボランティア実習にあたった。事業期間中の合計学習支援実施回数が422回であり、昨年度比168%とかなり回数を多く実施することができた。

(3) 医療機関・保護者への啓発活動

R4年4月16日(土)に副島賢和先生を講師として、オンラインの公開講座を実施した。参加者アンケートでは、回答者の約94%が5段階評価で「5とても満足している」と回答した。また、学習支援や学習支援ボランティア研修会に関することをHPやFacebook等で発信することで理解啓発を図った。

■1年間の目標に対する達成状況(まとめ)

(1) 第1期研修会受講生のルーブリック評価の結果によると、<知識技能>、<思考・判断・表現>、<技能>、<関心・意欲・態度>について全体的に数値に上昇が見られ、研修会を通して受講生の力が向上したと言える。病気や子どもたちの関わり、そして感染流行期の学習支援にも対応できるICTを活用した遠隔支援ができる人材を育成することができたと言える。

(2) 感染流行期によりほとんどがオンラインでの学習支援となったが、ICT機器等を用いて学習支援を継続することができた。事業期間内には小学生から高校生までの幅広い年齢層の学習支援に対応することができた。また、学習支援を実施したボランティアから、オンラインでの学習支援のコツや工夫を聞き、ノウハウを共有することができた。

(3) 公開講座「喪失からの回復～学ぶことは生きること～」には、医療関係者や福祉関係者、教育関係者、保護者や大学生などが参加した。講師の経験談、コロナ禍の病棟内の状況や子どもたちの学びの変化も踏まえた公開講座により、入院中や自宅療養中の子どもたちを取り巻く状況や子どもたちの思いについて、参加者に具体的にイメージして考えてもらうことができた。

小児科外来の待ち時間を活用した、小児科外来自習室の開放と学習支援実施の様子。

■事業を通じて得られたノウハウ

①遠隔学習・余暇支援に関するアイデアの蓄積

実際にICT機器等を活用して遠隔学習支援を行ったスタッフやボランティアの事例や工夫が蓄積でき、オンライン会議システムで支援をする際の姿勢や便利な機能、おすすめの学習アプリなど、今後の効果的な遠隔学習支援のためのアイデアを得ることができた。

②学習支援ボランティアや関係者等とのオンラインでの情報共有について

新型コロナウイルスの感染拡大状況から、学習支援ボランティアや対象児が入院している病棟の職員と対面で会う機会が減少していた。しかし、定期的に情報共有会をする日程を決めておき、オンライン会議システムで顔を合わせる機会を設けることにより、メールや電話ではなく直接顔を合わせて話す時間ができたことにより、お互いの関係構築にもなり、対象児についての情報共有が円滑にできるようになった。

■望ましい社会状況を達成するための課題

病気の子どもたちの教育的ニーズに応じた支援を実施できるよう、県内におけるニーズの把握と学習・余暇支援は継続していく必要がある。しかし、本来であれば、公教育による早急な学習機会の保証が必要である。コロナ禍が数年続いたことにより、長期欠席児童に対する学校の対応も変化が見られ、入院している子どもたちに対してICT機器を用いた授業配信や課題提出を実施している学校も見られる。学習支援を実施していくだけではなく、多くの人に病気の子どもたちが「学習したくでも学習できない」という状況にあることを知ってもらえるよう、在籍校との調整や広く理解啓発を図っていく必要がある。

■活動成果のアピールポイント（自由記入）

この1年間の活動を通じて	感染流行期にも入院・療養中の子どもたちへの学習・余暇支援を絶やさず継続できる人材育成と 病気の子どもたちの学習や余暇活動に関する理解者の拡大	を達成しました。

■受益者の具体的な変化（自由記入）

①学習支援者：ルーブリック評価や日々のやり取り等から、研修会受講生の学習・余暇支援に関する知識・技能が向上したことがわかる。受講生からは「病気のある子どもたちやその家族がどう過ごしているのか、何を必要としているのかを考える良い機会となった」等の声が挙がっている。
②病気による入院・長期療養中の子どもたち：個人に学習を任されていた時に比べ、定期的に学習に取り組む時間が増えたり、授業を受けておらず解けなかった分野が理解し解けるようになったりといった様子が見られている。
③病気の子どもを取り巻く人々：公開講座に参加した方対象のアンケートの回答では、93.9%が「とても満足している」と回答した。病気の子どもたちへの学習支援の意義と方法を理解した。